



部族民通信Youtube  
人類学講座

2025年10月  
~2026年7月

クロード・レヴィ・スト  
ロース著

野生の思考

La Pensée Sauvage

歴史と弁証法 Histoire et  
dialectique

サルトル弁証法批判

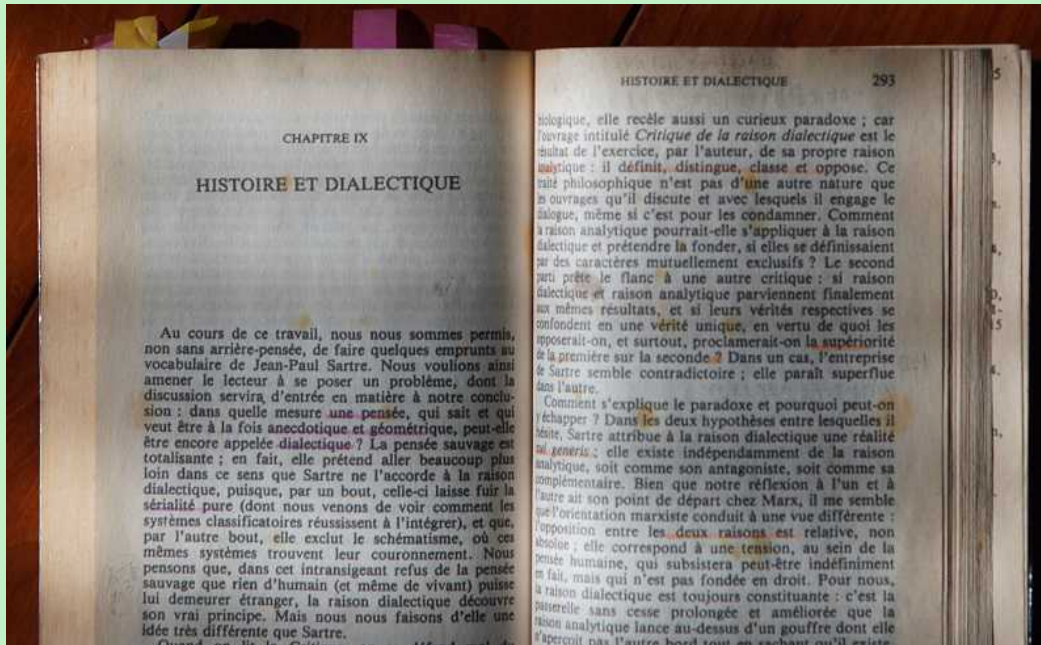


Claude Lévi-Strauss  
1909~2009  
(Bororo族調査時、1936年)

# 歴史解釈 レヴィストロースとサルトルの違い 理性優先か行程必然か

(2023年10月にHPに投稿した。加筆、書き換えを経て  
本文の出稿にこぎつけた。  
改正点は両者の思考原理の差、それに導かれる  
歴史感の差に焦点をあてた)

# 野生の思考 La Pensée Sauvage Histoire et Dialectique



サルトル著の弁証法理性批判  
Critique de la raison dialectique (1960年初版,  
右)  
野生の思考 (1961年初版) 第9章  
Histoire et Dialectique 歴史と弁証法



部族民通信2026年1月

# Histoire 歴史 両者の解釈の差



歴史は  
モノ 主体  
だ！

オレって実存主義だから



違うぞ サルトル

歴史は思  
想 客体  
だ！

分析理性からとらえろ

本文は3種の内容に分けられる

A：一般的な解説。理性とは歴史とは、「正統的」弁証法とはが綴られる。サルトルへの当てつけみみたいな調子に進む場合が多い。

B：サルトルの大著、弁証法的理性批判 La Critique de la Raison Dialectique への言及、論調は完全批判（否定）の辛辣さを帯びる。

C：レヴィストロースの視点から歴史、民族、弁証法を語る。彼は自身を近代理性主義の信奉者と位置づける。思想の根底にはカント主義、理性の優先、先験 Transcendantal が控えている。

これはサルトル実存主義を正反対の立ち位置となります。故に本章はヘーゲルに端を発する目的論の弁証法と近代理性を紙面の戦場で争うーと言えます。

野生の思考 La Pensée Sauvage  
Histoire et Dialectique

レヴィストロースはサルトル思想をどのように見ているか？

実存主義を横櫛に入れての弁証法の起点にヘーゲル、その応用である歴史展開をマルクスに学び、実践にはレーニン毛沢東主義に範を垂れた。彼の用語である Praxis/Pratico-InerteはヘーゲルのExpérience（思考経験、肯定否定の繰り返し）の引用であり、歴史ではマルクス主義そのものとなります。

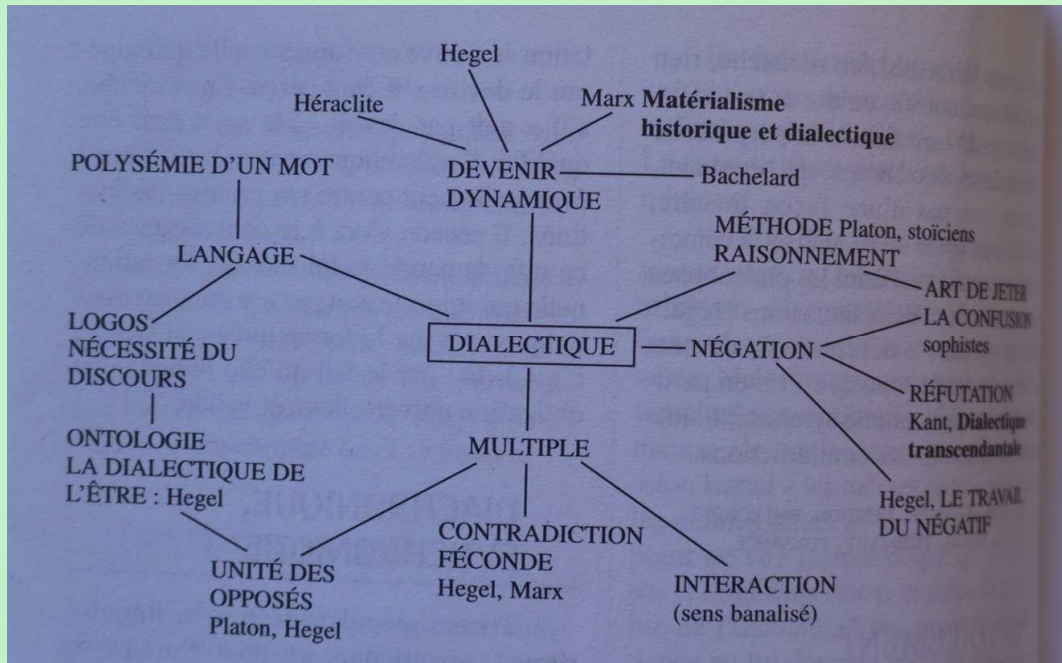
弁証法に対して前進後退 (Progressive/Régressive) の語をあてている。

## 野生の思考 La Pensée Sauvage Histoire et Dialectique

レヴィストロースはサルトル思想をどのように見ているか？

実存主義を横櫛に入れての弁証法の起点にヘーゲル、その応用である歴史展開をマルクスに学び、実践にはレーニン毛沢東主義に範を垂れた。彼の用語であるPraxis/Pratico-InerteはヘーゲルのExpérience（思考経験、肯定否定の繰り返し）の引用であり、歴史ではマルクス主義そのものとなります。弁証法に対して前進後退 (Progressive/Régressive) の語をあてている。

サルトルが説く「神の理性」弁証法をDialectique constitué（出来上がっている弁証法）と批判し、カントなどが説く「正統的」弁証法には、constituant 考える弁証法と区別している。語義の判別でサルトル批判、ないしレヴィストロースの自己思想述懐かを定めて、理解に進む。例えば Dialectique totalisante 統合する弁証法は一般の弁証法であり sérialité pure 単純連続性の語に当たればサルトル弁証法と疑う一など。



# 弁証法の体系

Dictionnaire de Philosophie  
Nathan から 解説は後文

弁証法的理性」の批判、本文に入る；  
本章第一文節を引用します。下文の前に「サルトルの文章、行句を借りることにした」と弁証法理性批判を相手にすると宣言した後に；  
« Nous voulions ainsi amener le lecteur à se poser un problème dont la discussion suivra d'entrée en matière de notre conclusion : dans quelle mesure une pensée qui sait et qui veut être à la fois anecdotique et géométrique, peut-elle encore appelée dialectique ? La pensée sauvage est totalisante ; en fait et elle prétend aller beaucoup plus loin dans ce sens que Sartre ne l'accorde à la raison dialectique » (page 292)

## 野生の思考 La Pensée Sauvage 具体科学 Science du Concret

弁証法的理性」の批判、本文に入る；

本章第一文節を引用します。下文の前に「サルトルの文章、行句を借りることにした」と弁証法理性批判を相手にすると宣言した後に；

« Nous voulions ainsi amener le lecteur à se poser un problème dont la discussion suivra d'entrée en matière de notre conclusion : dans quelle mesure une pensée qui sait et qui veut être à la fois anecdotique et géométrique, peut-elle encore appelée dialectique ? La pensée sauvage est totalisante ; en fait et elle prétend aller beaucoup plus loin dans ce sens que Sartre ne l'accorde à la raison dialectique » (page 292)

一つの問題点を表面に出し、議論を通して私の結論を導きたい、それを読者に明示するためにこの章を認める。問題点とは「思想は逸話的かつ地理的であると望み、かつ弁証法である」、そのためにはどのような「基準」に頼るのか。野生の思考は「統合的」と言える。結果としてそれ（野生の思考）は大いに進展する。サルトルは先住民思考を「劣った弁証法」と断言するが、進展の様はそれを前提として捉える予測を遥かに越える

野生の思考 La Pensée Sauvage  
Histoire et Dialectique

部族民：引用は前段の分類でA, 一般的解説で、最終の行にサルトルへの言及が入る。思想（単数不定冠詞がかぶさる、直訳は「特定しない、何でも良い一思想を採りあげる」）

未開思考もあり近代も対象とする。逸話的であるとは、歴史的時間軸に存在する小話で経時性を帯びる。地理的とはその域内での同時現象。すなわち思想とは経時かつ同時的に存在する。なおかつ（変遷する）弁証法的、その基準とは？答えは文列に記されている（質問を与え答えを従わせる、レヴィストロース的修辞）。「統合的totalisant」となります。

## 野生の思考 La Pensée Sauvage Histoire et Dialectique

部族民：引用は前段の分類でA, 一般的解説で、最終の行にサルトルへの言及が入る。

思想（単数不定冠詞がかぶさる、直訳は「特定しない、何でも良い」の思想を採りあげる）未開思考もあり近代も対象とする。逸話的であるとは、歴史的時間軸に存在する小話で経時性を帯びる。地理的とはその域内での同時現象。すなわち思想とは経時かつ同時的に存在する。なおかつ（変遷する）弁証法的、その基準とは？答えは文列に記されている（質問を与え答えを従わせる、レヴィストロース的修辞）。「統合的totalisant」となります。

同時的に存在し経時変遷を見せる、そこに思考が事象を統合する。「思考作用、理性」が主体となって統合を駆使する。

「中身が決められconstitué」ている、思考はモノに従属する、サルトルの弁証法と対比させている。

歴史とは理性優先か、原理覇権かが争点なので、目の下の文の意をいずれかに峻別し、行間を詮索する。本書の読み解き方です。

« Quand on lit la Critique, on se défend mal du sentiment que l'auteur hésite entre 2 conceptions de la raison dialectiques. Tantôt il oppose raison analytique et raison dialectique comme l'erreur et la vérité, sinon même comme le diable et le bon dieu, tantôt les deux raisons apparaissent complémentaires » 「批判＝弁証法理性批判」を読むと不可解な感情にとらわれる。著者の弁証法理性に向かう姿勢は2の理念に挟まれ、必ず躊躇いが伺える。時に分析理性とは誤謬と真理、さらに悪魔と神の対立と仄めかすが、別の展開では両者は補完的とも思えさせている。（次文でサルトルをして「異なった道筋ながら同じ真理に到達」する補完理性と、レヴィストロースは指摘する）

野生の思考 La Pensée Sauvage  
具体科学 Science du Concret

« Quand on lit la Critique, on se défend mal du sentiment que l'auteur hésite entre 2 conceptions de la raison dialectiques. Tantôt il oppose raison analytique et raison dialectique comme l'erreur et la vérité, sinon même comme le diable et le bon dieu, tantôt les deux raisons apparaissent complémentaires » 「批判＝弁証法理性批判」を読むと不可解な感情にとらわれる。著者の弁証法理性に向かう姿勢は2の理念に挟まれ、必ず躊躇いが伺える。時に分析理性とは誤謬と真理、さらに悪魔と神の対立と仄めかすが、別の展開では両者は補完的とも思えさせている。（次文でサルトルをして「異なった道筋ながら同じ真理に到達」する補完理性と、レヴィストロースは指摘する）

その著者は「批判」で本来身にする分析理性を展開している一との指摘に続いて  
« Il définit, distingue, classe et oppose. Ce traité philosophique n'est pas d'une autre nature que les ouvrages qu'il discute et avec lesquels il engage le dialogue, même si c'est pour les condamner. Comment la raison analytique pourrait-elle s'appliquer à la raison dialectique et prétendre la fonder, si elles se définissaient par des caractères mutuellement exclusifs ? (page 293)

（本引用はサルトルの矛盾を言い表すB）。

野生の思考 La Pensée Sauvage  
Histoire et Dialectique

彼は決定し区別し、分類し対立させる。この哲学的所作は彼が採り上げる作品に対し、それら手法でもって対話（批判）している状況そのものである、それら作品に漂う分析理性を否定するにせよ、分析に傾く。もし両の理性が相互に排他と決めつけるならば（サルトルの主張）、いかにして分析理性が弁証法理性に協働し、基礎固めまでする（サルトルの姿勢）と言えるのか。

野生の思考 La Pensée Sauvage  
Histoire et Dialectique

部族民：前文、前前文で分析と弁証法の理性は補完と力説している（レヴィストロースの立位置）。しかるにサルトルは分析理性を誤謬と糾弾しながら、分析理性を駆使して他者批判をしているのではないかーサルトルには致命的指摘です。レヴィストロースのサルトル批判はマルクス（神の弁証法）否定につながる。部族民が知る限りレヴィストロースがマルクスに言及した行句は、

びっくり仰天の「La Marxisme = 男性のisme主義を女性形にしてしまった」しか見当たらない（悲しき熱帯ポケット版61頁）。ヘーゲルには一句の文すら起こしていない。一部の評者が「レヴィストロースは共産主義」と誤りの論を展開するが、カント主義者を標榜する彼にはあり得ない。レヴィストロースを読まない識者の意見かもしれぬ（ここは余談）。

野生の思考 La Pensée Sauvage  
具体科学 Science du Concret

« Bien que notre réflexion à l'un (両論は対立) et à l'autre (補完) ait son point de départ chez Marx, il me semble que l'orientation marxiste conduit à une vue différente : l'opposition entre les deux raisons est relative, non absolue ; elle correspond à une tension au sein de la pensée humaine qui subsistera, peut-être indéfiniment en fait, mais qui n'est pas fondée en droit »

## 野生の思考 La Pensée Sauvage 具体科学 Science du Concret

« Bien que notre réflexion à l'un (両論は対立) et à l'autre (補完) ait son point de départ chez Marx, il me semble que l'orientation marxiste conduit à une vue différente : l'opposition entre les deux raisons est relative, non absolue ; elle correspond à une tension au sein de la pensée humaine qui subsistera, peut-être indéfiniment en fait, mais qui n'est pas fondée en droit »

両論は対立するか補完するかを選択は残るにしても、すべて起点はマルクスに求められる。しかしマルクス主義の方向は（サルトルとは）異なる局面を見せると余には思えてならない。そこでの両論対立は相対的、非絶対である。思考の奥底に見出される「一種の張りつめ」、それにこの両論対峙が呼応している。それを人間的な思考とする、心にまっすぐに置かれていないが、永遠に残る。

野生の思考 La Pensée Sauvage  
具体科学 Science du Concret

マルクス主義に認められる心の内の「一種の張りつめ」、永遠であるが捕まえにくい。これは部族民の理解を超える。ここでは神の論理をかざすマルクスにも残る「人間理性を指している」とする（=MSのAI、Copilot参考）。この一部残った人間的理性をサルトルが全面否定するーと読む。皆様の反論を乞う。

野生の思考 La Pensée Sauvage  
具体科学 Science du Concret

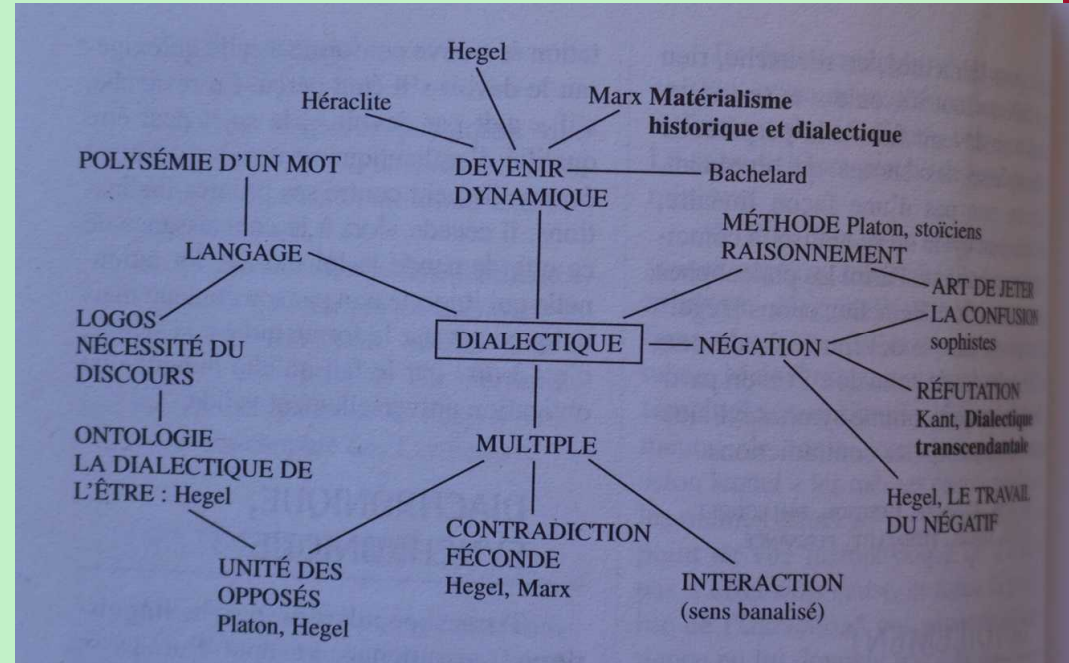
« Pour nous, la raison dialectique est toujours constituante. C'est la passerelle sans cesse prolongée et améliorée que la raison analytique lance au-dessus d'un gouffre dont elle n'aperçoit pas l'autre bord ; tout en sachant qu'il existe et dût-il constamment s'éloigner » (page293) 弁証法理性とは常に「構成する」思考だ。留まることを知らず伸ばされ改修され、窪地の上に掛けられる橋とも比定される。向かう先は見えていない。渡り終わる先があると確信するものの、それはどんどん遠ざかっている。

## 野生の思考 La Pensée Sauvage Histoire et Dialectique

中央の弁証法が四方に枝分かれする。上下にはヘーゲルとマルクスが並ぶ（赤丸）。上はdevenir dynamique 躍動する成り行き、マルクスには唯物歴史弁証法の注釈。下の赤丸にはContradiction Féconde 間断ない反対とある。これは唯心（ヘーゲル）唯物（マルクス）の差を認めるものの、一の真理が提出され、否定してたな真理に向かう変遷を原理として示している。

« Marx acceptera dialectique hegelienne, mais il en inverse le sens, descendre du ciel sur la terre »  
(同辞書の説明文)

はマルクス弁証法はヘーゲルの方向（ヒト精神が弁証法思弁を展開する）を逆転し、天から地上に舞い降りたとの注釈です。神でもなければ歴史進行の原理を決められない。古代奴隷制から共産社会に向かう「歴史弁証法」は神の摂理で、必然として神弁証法の調和が成就する。サルトルの語る神の弁証法の表現はマルクス思想を移入したと分かる。カントは右（青丸）に位置する。Réfutation理性としての否定が注釈される。



(写真はDictionnaire de Philosophie Nathan版、110頁)



サルトルは歴史必然である共産暴力革命を成し遂げた国への訪問を多くする。

写真上はキューバ、チェ・ゲバラと会談（1960年）。

下は中国訪問（1967年）

ソ連には複数回

同伴はボーボワール

（写真はWikipediaから）



野生の思考

La Pensée Sauvage II

歴史と弁証法

Histoire et Dialectique

Ⅰ了